



2024年7月24日発行 編集:

花鳥風月

我々の夏休みを求める心とともに外は燃え盛り、うんざりとした暑さが続く頃合いになりました。日本の夏は気温、湿度ともに高くなる時期が長いことが特徴です。そんな長引く暑さが理由で発達した日本の文化は数多くありますが、その中でも親戚や知人など親しい人の暑中の暮らしを気遣って送るのが「暑中見舞い」です。元々はお盆に里帰りをする際にお供え物を直接届ける風習だったものが、明治初頭に郵便制度が整備されたことを境に簡略化されていき、現在のようにあいさつ状を送る文化となっていったそうです。当初の形こそ失われたものの、今にまで残っている文化を大事にしたいものです。手紙を書いたことがなかった人も、何となくペンを持つ手が重かった人も、暑中見舞いという形で送ってみては？（ ）



このコーナーでは、図書館内で新たに始まった取り組みであるポップ作りについて紹介します。

ポップ、ステップ、ジャンプ！

今、図書館では一年生を中心として「みんなに読んでもらいたい！」「面白そうだから紹介したい！」とセレクトした本を、ポップ作りで紹介しています。写真は初めて掲示されたポップです。紹介された本は『考えるカラス』。NHKの教育番組を取り扱った科学の本です。試験管をかたどった用紙に、黒い画用紙で作ったカラスがなんとも言えない眼差しでこちらを見つめています。このポップ、どこにあるかわかりますか？ ぜひ、図書館内で探してみてください！



↑局員渾身のポップ

ポップには局員一人ひとりの工夫が光っています。ポップを見ても楽しい、紹介本を読んでみてさらに楽しい。そんなポップ作り企画を目指します。これを機に、普段読まない本も手にとって見ては？ 新たな世界とともに、皆さんの見聞が広がっていくはずですよ。（ ）



ジョーン・G・ロビンソン 著
高見浩 訳
新潮社



『カラフル』



森絵都 著
文藝春秋

あなたは、夢や幻のような不思議な体験をしたことがありますか。夢や幻は、いつかは儚く散ってしまうものです。しかし、ほんの一瞬だけ見えた幻想でも人を変えるきっかけになることだってあるでしょう。周りと壁を作り、心を閉ざしていたアンナ。そんなアンナは夏休み、自然豊かなノースフォークでマーニーと名乗る少女に出会います。マーニーは、アンナにとって初めての親友となり、彼女と過ごす時間が増えるにつれ、アンナの顔には自然と笑顔が増えていきました。しかしある時突然、アンナの前からマーニーは姿を消してしまいます。アンナとマーニーのひと夏の思い出は幻想だったのか、それとも一読の視点によって、解釈が変化する神秘的で美しいファンタジー文学です。爽やかな夏の季節、夢のような心に残る思い出をぜひこの一冊と一緒に。（ ）

前世で罪を犯した魂が天使と出会い、自分の罪を思い出すため、服毒自殺を図った少年の体にホームステイする。この物語はそんな突拍子もない話から始まる。ここだけを聞くと、奇想天外で現実味のない話だと思っただろう。だが実際は私たちが普段感じる喜び、悲しみなど「普通」の感情がありありと書かれていて、とても共感できる物語だと思う。少年・真としての日々を過ごすうちに周りを取り巻く様々な人たちと関わり、真が感じていたであろう孤独や不安、もどかしさ、息苦しさなど色々な感情に触れていく。この本を読むと気持ちが軽くなる。この魂がどんなことを思い出したのか気がなる人、現在、不安を抱えている人は是非読んでみてほしい。この本は私たちに寄り添い、前へ進む背中を押してくれるだろう。（ ）



このコーナーでは、局員が今までに読んだ本を評価とともに紹介していきます。

最近のコロナ情勢下で注目されるようになった、ゲノム編集技術を使用した食品。この情勢下でなぜ注目されるようになってきたのか？ ゲノム編集食品は悪いものであるという間違った意識が一般化していたのが、なぜ今、未来の食品の安定した供給を担うと言われたのか？ 一体、この技術を利用することで何が可能になり何がリスクとなるのか、この先の日本で予想されていく、自給する力の低下による衰退を、ゲノム編集はどのように支え、どのように発展を促すのかを書いた本です。ゲノム編集食品が悪いものであるというメディアによる「情報災害」を中心に展開されていく物語なので、情報リテラシーの重要性や物事に対する先入観の危険性も考えさせられます。この本は世論に対して自分の意見を持ち、自分の考えを発信していく大切さを感じることが出来ます。（ ）



『ゲノム健康食品が変える食の未来』
松永和紀 著 / ウェッジ

オススメ度
知識度
将来性



みなさんは普段、音楽を聞きますか？ 私は勉強を始める前や、夜寝る前によく聞いています。音楽はいいもので、日常の生活にほんの少し彩りを与えてくれます。そんな音楽ですが、現在流行っているアーティストの曲について調べていると、日本や海外のものまで、「小説」を元に曲を作っているものが多いように感じます。ということで、このコーナーでは音楽と小説について書いていきます。

小説を元にして曲を作っているアーティストの代表として挙げられるのはYOASOBIです。しかし、YOASOBIは作曲をする際に依頼元に新たな短編小説を作ってもらい、それを元に曲を作っていることもあるそうです。「小説を元に曲を作る」というテーマと少しずれてしまうため、私が例に挙げたいのは「ヨルシカ」です。ヨルシカはコンポーザーのn-bunaさんとボーカルのsuisさんの二人で構成されているロックバンドです。2017年から活動を開始し、現在も精力的に活動しています。私はヨルシカの大ファンで、ヨルシカのことを書きたいがためにこのテーマを選んだといっても過言ではありません。

ヨルシカのいくつかあるアルバムの中に『幻燈』というアルバムがあります。このアルバムでは小説を元にした曲が多数収録されています。その中からいくつかピックアップして、音楽と小説がどのように関わっているかを考えていきます。

まず、ピックアップする曲は『又三郎』という曲です。この曲は、曲名からわかるように宮沢賢治作『風の又三郎』をモチーフにして作られています。曲の歌詞の中にも「青いくるみも吹きとばせ 酸っぱいかりんも吹きとばせ」だったり、「どっどど どどうど どどうど どどう」という実際に作中に出てくる表現が散りばめられており、ヨルシカの宮沢賢治に対するリスペクトが表れています。『風の又三郎』は、とある田舎の学校にやってきた不思議な転校生と生徒との交流を描いた短編小説です。転校生が、初日から赤い髪などの特徴的な姿で周りを動揺させ、静寂を打ち破ったり、周りとすぐに溶け込み退屈を吹き飛ばしていく様はとても爽快感があり、読んでいてとても気持ちがいいです。ヨルシカは、この不思議な転校生の姿と曲とを重ね、現代社会の閉塞感、不安、憂鬱などを打ち壊すというコンセプトのもとこの曲を作り上げました。

次にピックアップする曲は『第一夜』という曲です。この曲は夏目漱石作『夢十夜』をモチーフにして作られています。『夢十夜』は第一夜から第十夜の全十話で構成されている短編集です。ヨルシカは全十話分の曲を作っていて、そのうちの一つが今回紹介する『第一夜』です。第一夜は、死んでしまった女の再来を男が100年待つとても素敵な恋のお話です。このお話では百合の花が重要で、ヨルシカは歌詞の中に「白い花を一輪持って」と百合の花を連想させる言葉を混ぜたり、「白百合香る道を走って」と直接見たわけではないけれど、百合の花の存在を確かにするような表現を入れたりしています。ヨルシカは作品について独自の解釈をしながらも、作品の良さをちゃんと残して曲を作っています。

ヨルシカは、今回紹介した曲では、小説中の登場人物や短編集の一つから着想を得て、独自の解釈を加えて作曲をしていましたが、他の曲ではもっと他の着想の得方で作曲をしています。これを機にヨルシカの曲を聞いてみてください！ そして、元になっている小説を図書館へ読みに来て、立派な図書館ヘビーユーザーになりましょう。受付でお待ちしています。（ ）